



福地会長(左)、筆者(右)

元通信総合研究所長

畚野 信義

畚野信義氏は電波研究所において宇宙科学や衛星開発で活躍されました。この連載は、JFSCが畚野氏へインタビューしたことをきっかけに実現しました。今回は第2回目として、以下の内容を寄稿いただきました。

- NASDA設立時の思い出
- NASA勤務から学んだこと

衛星通信フォーラム会長
首都大学東京教授
福地 一

3. 宇宙開発事業団(NASDA)設立の頃の思い出

昔の国研にはビッグプロジェクトは無かった。電波研初めてのビッグプロジェクトと言えるものは、東京オリンピックの衛星中継で有名になった鹿島支所の建設や一連の実験であった。しかしNASDAの仕事は金のケタが違い、極端な表現をすれば、一人当たり平均一億円を使うのが仕事であった。仕事の質が異なり、全く違ったやり方が必要だった。電波研(昔の国研)の研究者は自分の仕事は一切全部自分でやっていた。そういう仕事の仕方しか知らない人たちがNASDAへ行って同じようなやり方で仕事をしようとした。よく出来る人ほど自分の力に自信があり、その傾向が強かった。そこにいろいろな悲喜劇が起こった。特に悲劇は深刻だった。NASDA発足後間もなく、熱真空環境試験の責任者だった浅井さんが亡くなった。元々心臓が悪かったのを無理したのであった。当時の病名が心臓弁膜症、今なら不整脈でペースメーカーを入れればもう少し何とかなったかと思われるが、そんなものは未だ無い時代だった。そういう状態でNASDAへ行けば悪くなることは分かっていたが、責任感の強い人だった。



▲浅井順一氏



▲ 錦織 清氏

数年して電離層観測衛星(ISS)の責任者だった錦織さんが手遅れの胃がんで亡くなった。胃の調子が悪いことを知りながら、多忙のため検診を受けていなかった。1974年5月、私はゴダードから帰国した。いろいろな状況があり、考えた結果地球物理をやめ、通信衛星(ETS-II, ECS)をやる(従ってISSの質量分析器からも足を洗う)ことにした。その挨拶に錦織さんをNASDAに訪ねた。その日NASDAは運動会が昼休みを拡大して午後一杯浜松町の駅の反対側の芝離宮恩賜公園でやっており(やはり平和な時代だった)、貿易センタービルのオフィスには体調の悪い錦織さんだけがひとりポツンと残っていたことを思い出す。胃の調子が悪いというので検診を受けるように強く勧めた。次の週位に検診を受けたようだったが手遅れと分かった。

ISSは当時科技庁が開発していたQロケットで打ち上げるとして、電波研で1966年から計画が進められていたが、Qロケット計画は消滅して(「オバQロケット」となり)、アメリカからの技術導入されたNロケットで1976年に打ち上げられた。錦織さんは昔の国研の研究者らしく、真面目で実直な人柄だったので、プロジェクトの見直しや他人(他国)任せのロケットとのスケジュール調整や慣れないアメリカから丸写しの宇宙プロジェクトの進め方などからの心労やストレスも胃がんの原因に繋がったのではないかと推測される。打上げ間近の死だった。

ISS-1は打ち上げ約一ヶ月後、2次電池の急な温度上昇で失敗した。電波研でのこのプロジェクトに最初から関わり、主ミッションの電離層サウンダーの担当で、錦織さんの死後、実質的にISS全体の責任者でもあった内倉さんが突然亡くなった。心筋梗塞だった。この失敗は明らかに熱設計の誤りだったと思われるが、彼は衛星の初期試験運用にも手抜かりがあったのではないかと真剣に悩んでいた。宇宙開発のやり方に不慣れな(馴染めない)真面目な研究者の3人目の犠牲者であった。

しかし、この頃(ISS失敗直後)ETS-IIの打ち合わせのためにNASDAに行き、それが終わってからついでにと立ち寄った時にISSオフィスの中に感じた雰囲気は忘れられない。連帯責任のある人たちが皆、自分とは関係ないかのように振る舞い、内倉さんに近付かず、内倉さん一人に責任を押し付けようとしているように見えた。その異様な空気に強い衝撃を受けた。夜かなり遅くまで内倉さんを慰めてイロイロ話を聞いた後、重い気持ちで帰った。それが内倉さんに会った最後になった。



▲ 内倉謙司氏

NASDA設立の頃の思い出と言えば、矢張り技術導入のテンヤワンヤと縄張り争いの泥試合であろう。

自主開発の唯一の看板であった「Qロケット」が「オバQ」になり、設立時にハナバナしく打ち出した一連の実用を謳い文句とした衛星の打ち上げスケジュールに大きな遅れを避けるためには、ナリフリ構わぬ技術導入しかなかった。それはロケットだけでなく、「実用衛星」の製作に関わる作業手順から衛星環境、信頼性、各種試験、更には運用・管制等に関わるものすべてについて経験も知識もゼロに等しい状態からの出発だったから、丸ごとの技術導入は必要不可欠だった。この段階で起こったイロイロな事実(事件)の一つひとつはナカナカ面白く、もうソロソロ話してもよい時期かと思われるが、キリがないのでここでは触れないことにしよう。

ロケットは勿論、衛星開発や管制に留まらずどの分野でも、当時の宇宙開発とはアメリカの受

注会社(形の上では日本の会社の下請け)の作ったガイドブック(正確な名称は忘れた)の勉強(精読)から始まり、それを丸呑みし、金科玉条として、そこから少しの逸脱も許さず実行することであった。一方、そこに書いていないことについては、全く知識もなく、予測も想像もつかないというのが正直な実情であった。そして、後進国への技術移転の習わしとして、作業手順や許容誤差には詳細だが、その根拠や本質(背景)の説明は全くと言ってよいほど書かれていなかった。

当時は皆夢中だったが、ゼロからの技術導入というのはそういうもので、明治維新にも同様のことが数多くあったのであろう。そして知識のギャップは推測で埋めるしかなかった。中国の高速鉄道建設は、車両などのハードの技術導入をしてドンドンとデッドコピーを作って走らせたが、運用等のソフトに注意を払わなかったので例の重大事故が起こったのかも知れ(に違い)ない。ソフトと言えば衛星の運用管制用のソフトなどはベラボウナ値段がした(後になって実はたいした内容がなかったことが分かったのだが)。当時の日本政府の予算はモノ(ハード)にしか出なかった(労務費は時間というモノの対価)。しかしこれを買わないと衛星運用が出来ない。如何に大蔵省に納得して貰い(騙して)予算を取るかという工夫や駆け引きにも知恵を絞ったが、今にして思えば正にマンガであった。

当時のNASDAの組織としての位置付けは、ユーザー(電離層観測衛星や通信・放送系衛星は郵政省、気象衛星は運輸省等)から衛星の発注を受け、製作し、打ち上げてユーザーに引き渡し、その後も衛星本体の維持管理(管制等)を行う機関というものであった。従って、ミッションと最初の全体的な仕様書はユーザー側で作る。しかし、ユーザーからの仕様書は杜撰なものでも、後の製作の手足を縛るような詳細なものでもNASDAが困る。また、仕様を作るには実際にユーザーで実験用モデルを作って性能を確かめる必要がある。しかし、これを先の方まで細かくユーザー側が固めると、その後で実際に飛ばすものを作るNASDAにそのツケがマワッテ来る。一方、ユーザー側としてはミッションの内容(目的)を無視して、ただ無難に作るだけではやる意味がない。これをどこで切り分けるかで、イロイロな(具体的には大抵の場合EMをどちらでやるかというような)攻防(縄張り争い)があった。この争いの両側の前面に立つ当事者は、電波研からの出向者同士で、お互い苦労があったというより、上司等との板挟みで辛い思いをした人が多かったようだった。これとは少し違うが、ETS-IIの運用の打ち合わせで、科技庁から来た係長が「地上から見えない時に衛星を動かす(ビーコンを出す)のは危険だから、視野から去る時にコマンドでビーコンを止め(電源を切り)、頭上に現れたら出す(入れる)」というトンデモナイことを言い出した。「そんなことをしたら実験の価値が下がるし、その方が危険だ」という私との間で論争(喧嘩)になり会議は2-3時間空転した。最後に「本当にそんなことをするのですか」と電波研出身のI課長に言ったら、「いやそんなことはしません。そんなことをする方が危険です。」と答えてくれたのでやっと決着した。その間、若いものの喧嘩を前にして、彼もイロイロ悩んでいたに違いないが、当時の会議はそういうマンガのようなやり取り(突っ張り合い)で何時も時間を空費していたことを思い出す。

当時の衛星開発の手順はBBM→EM→PM→FMと形の上では基本的には今とあまり変わらないが、内容はかなり違っていた。こういうところも当時のアメリカ方式そのまま、ECSまではFMのバックアップモデルが実際に作られており、ISS、ECSでは失敗の一年後に再打ち上げが行われた。生研時代の観測ロケットの搭載観測機器にもバックアップが作られていた。最近は日米ともそんな金のかかることはやっていない。宇宙実験に失敗は当然という初期の宇宙開発の考え方というか、アメリカのやり方がそのまま導入されていた。

4. NASAの勤務から学んだこと

1971年11月上旬のある日、11月14日に出港する南極観測船への積み込みの締切日の朝、南極観測ロケットに搭載する観測器の調整がやっと終わり、真空に封入して送り出した。気

が立っていて4日4夜一睡はおろか、椅子に腰を下ろすこともなかった(若かったなあ)。

ヤレヤレソファーで横になるかと思ったとき、米国科学アカデミー(NAS)からの招聘状が届いた。急いで家へ帰って寝た。その数年前、科技庁の在外研究員制度の試験に2度落ちた。2度目の時、科技庁の知り合いが「あれの最後は推薦で決まる。お前の推薦状は推薦になっていない」と囁いてくれた。心当たりがあったので、自力で行こうと決め、今風に言えばNASのポスドクで行くことをターゲットにして、急いで学位を取り、同じ分野の研究をやっていたNASAのGSFCのセクション(Chemosphere Section)・チーフ(Dr. Aikin)を受け入れ先にして提案書を半年ほど前に送っていた。翌年3月37歳の誕生日に出発した。こう言うとアツという間に出来たかのように聞こえるが、方針転換してからやはり4-5年かかっていた。

当時からアメリカはバイアメリカンを実行していて、送ってきた航空券はノースウェストだった。乗ったトタンに日本語は何も通じなくなった。当時のアメリカの航空会社は日本人のステュワデスを乗せていなかった。妻子4人を連れてこれでアメリカで金を稼いで食って行けるのかと思った。しかし、それはすぐ忘れてハワイで降り(当時の大抵の飛行機はアメリカ本土まで一気に飛べなかった。ハワイで2泊することにしたが、ハワイの宿など予約もしていなかった。空港のヘルプデスクのおばさんは妻と小さい子供3人も連れて私の無謀さに驚いていた様子だったが、運よく日系の人でずいぶん親切にしてくれた。次のロスアンゼルスではタマタマ空港を出たところに来ていたデザートインというモテルのシャトルバスに乗り、そこに2泊し、レンタカーを借りて、生まれて初めて道の右側やアメリカの高速道路を走りディズニーランドへ行った。長男が小2、次男が幼稚園を終えたところで、長女は3歳だった。2年余り後に帰国して「神田川」という歌を聞いた時、銭湯へ行くところが新婚時代に井の頭公園の近くのアパートに住んでいた頃のことを思い出したものだ。しかし今は、「若かったあの頃は、何も怖いものが無かった」というフレーズにシミジミ感じるものがある。

NASAで働き始めてから、近くの高校の「英語を第2国語とするコース」に家内と夜間に通った。これで英語(特に発音)がうまくなったとは思わないが、怪しい英語が聞き取れたり、何処の出身かなどが分かるようになった。アメリカは移民が多く、訛りの強い変な英語を喋る人が多いので、広い意味では英語がうまくなったのではないか。その中で特に印象に残るのは、最初に順番に自己紹介させられた時、特に訛りが強く、全く言っていることが聞き取れず、出身さえ分からなかった男がいた。半年くらいしてから彼は自分の出身を「ケベック」と言っていたことが分かった。

「NASAの勤務から学んだこと」という注文だが、研究で学んだことは余りなかったが、研究の仕方というか仕組みというかの違いにはイロイロ考えさせられた。例えば日常会話はもちろん、研究についての議論では、互いにファーストネームで呼んで上下の関係なく対等に主張し合う一方、「俺の研究のこれにこれだけの金を出してくれとか、去年これだけの成果を挙げた(論文を書いた)のだから、俺の給料を上げてくれ」などという時に突然上下関係が出て、その話が終わると次のディスカッションではまた対等のものの言い方に戻るなどということには、何事も上下の枠組みの中で物事が進む日本しか知らなかった私には大変新鮮であった。

アメリカは私(或いは一般)の予測と違って権威主義的(ドイツほどではないが)、階級主義的(英国ほどではないが)である。研究室(個室が原則)の名札は学位を持っていると「Dr.・・・」無ければ呼び捨て(「Mr.・・・」と書かれるのはDivision Chief以上)である。あるアメリカ人の話では、これは必ずしもヨーロッパの権威主義を真似たものではなく、何処の馬の骨かも分からない寄せ集めの集団のアメリカで、そいつがどんな奴かを見分けるために肩書は必要なのだ(必要以上に重視される)そうである。建物の前の良い場所の駐車スペースはSection Chief以上の指定制でそれ以外は裏の方の遠く離れた駐車場である。これはまだ良いとして、Cafeteriaの他にExecutive Dining Roomという豪華な食堂があり、Division Chief以上はそこで昼食を取るとい

ヨーロッパ式である。しかも同じものでも値段はCafeteriaより安い。

研究以外で学んだ(経験し、感じた)ことはもっとイロイロあった。それらの幾つかを紹介しよう。それらは私のその後の人生に大きな影響を与えた。また、それらのお蔭で今日の私があると言っても過言でないような気がする。最近「若い人たちが留学をあまりしたがない」とマスコミなどで騒がしい。私も大学に深く関わった経験から、今それを強く実感している。自分の経験から言って、若いうちにイロイロ経験することは非常に大事なことだと思う。私のここでの話が若い人たちの気分を変えるのに何かの役に立てばうれしい(しかし、若い人はこういうものを読まないかも)。

アメリカの研究室(Office)は個室が原則であるが、最初の半年は半年後に任期が終わる男とシェアすることになった。彼は私の到着した日に3人目と4人目になる双子の子供が生まれた。少しでも関係のある研究をしているところへ片っ端から最近の論文を送り、一週間後位に次々電話して「どうだ、おれの論文読んだか。面白かったら(私は彼と当時似たようなことをやっていた。私ならそんなことはとても言えない程度のもだった)。」から初めて、何とか次の職を得ようと必死で食い下がっていた。素気無く断られてもメゲズにこれを3ヶ月以上続けて、とうとうNRL(Naval Research Lab.)のポストを得た。私はこれを見ただけでアメリカへ来た値打があったと思った。彼はその後NRLで研究室長になり、後にアメリカ最大のシンクタンクSAIC(Science Applications International Corp.)の宇宙・地球研究所長になった。

GSFCで働き始めてそんなに経っていない頃だったと思われるが、日本(NASDA)から「ISSに搭載する予定のテープ・レコーダーがうまくいかない(故障ばかりする)。ブラックボックスになって中を見ることが出来ず原因がわからない。アメリカのメーカーからはロクに返事が来ない。そちらで調べてくれないか。」と言って来た。GSFCの中で衛星搭載用テープ・レコーダーの経験のあるところを探して相談すると、「あのEndlessタイプは欠陥があるので、アメリカでは大分前にキャンセルになっている。どうしてあんなものが採用されたのだ。調査に来た奴に一番いいピープショウを見せたのではないか。」とまで言われた。彼らに紹介されたReel to Reelタイプの会社に電話をかけると副社長が飛んで来た。前の有名な大会社と比べものにならないベンチャーのようなところ(別の有名会社からのスピンアウトらしかった)だったが、何を聞いても分厚い説明書の該当部分をパッと開いてテキパキ説明するのに感心した。アメリカでは有能な人物がトップダウンで仕事をしているということを実感した。直ぐ日本へ行かせると、斎藤先生から「透明のプラスチックケースに入っていて、動作がハッキリ分かる実物を持って来た。」と手紙を貰った。その会社がISSのテープ・レコーダーを担当することになった。何も知らない後進国を食い物にする先進国企業のビジネスの実態の一部を垣間見た気がした。

行って半年ほど経った秋(1972)、突然NASAでレイオフがあった。大統領がニクソンに変わって、民主党の始めたプロジェクトのスカイラブが打ち切れ、アポロ計画も終結させて、共和党のスペースラブへの移行の過程にある時で、月着陸船を設計した男がアイスクリーム売りをやっているという噂がNASAの中で流れている頃だった。

レイオフというのはアメリカの企業で景気が悪くなった時行われるものであることはよく知られている。被雇用者は全員言わば背番号が付いている。背番号の数字は雇用されている期間の長さ、勤務成績等様々なパラメータで積み上げられる。レイオフは背番号の小さい方からクビ(解雇、一時解雇、自宅待機等)にすることである。ベテラン(復員兵、当時のアメリカは徴兵制があった)にはプラスの点を与える企業もある。アル中やセクハラ、喧嘩・交通事故等はマイナスになる。その中で勤務年数は重視される。アメリカでは長く勤務したということは、企業側が長く居てほしいと評価された人なのである。ダメな者はサッサと辞めさせているのである。しかし、これを国の組織(NASA)でまでやっているとは知らなかった。

レイオフに当たってはレイオフの人数の他に、今回減点する基準が示され、背番号の再評価

(再計算)があり、点数の少ない者から職種ごとに所定人数までがクビになる。自分は何も悪いことをしていないのに上の順位の者が陥落して来て若い者が弾き出されてしまうことが起こる。弾き出されたものは一カ月以内に次の仕事を見つけて出て行かなければならない。ハーフタイムで私のところへ来ていたテクニシャンも弾き出されて別の男が来た。前の男はフランス系の水兵上りで、終戦直後に広島へ入ったらしく、大変なことを見た、2度とあんなことをするべきでないと怯えたような眼で話していた。アルコールで問題を起こしたことがあるらしく降格されたが、所謂ベテランだったのでクビになる一歩手前で助かって、ジャンターの部門に回されたようだった。ということは彼に弾き出されてクビになった奴がいるということだった。新しく来たテクニシャンは電気回路系の仕事でナカナカ腕の立つ男で、レイオフは私には幸運だったが、何かやるとここをこれだけ良くしたといちいちクドイほど私に念を押す癖があったというより、力をボスに認めて貰って自分の仕事を安泰にしたいという一心だったのだろう。皆家族のセキュリティを守るために必死だった。当時日本人から見れば豊かで優雅な生活をしているように見えていたが、それをするには生易しいものではないと気が付いた。彼の趣味は週末にウェストバージニアで大木の上にジッと座り込み、下をシカが通ると大型の弓矢で「ヴイン」と撃ち獲ることだった。金曜日に限って朝私が行くともう来ており、午後になるとソワソワして、3時頃には今日は早く来たからとそそくさと帰って行っていた。

レイオフの他に、私の居た2年余りの間に2回プロジェクトと組織の見直し(廃止)があった。一回目に私の隣のオフィスの研究者のプロジェクトが廃止になった。50過ぎの独身のシニア・サイエンティストで本人も驚いたようだった。何年か前にヘッドクォーターから「この一年一回もペイチェックをキャンセル(現金化)していないが」と問い合わせがあり、オフィスのデスクの引き出しを調べると開封していない封筒がゾロゾロ出て来たという話で有名な男だった。12時に出勤して、大きな耐熱ガラスのコップにセイロン紅茶の葉を入れ、上から湯を注いだものを呑みながら休みなしに8時間働いて帰り、豪華レストランでディナーを取るという生活をしていた。朝寝坊なのだろうと思っていたら、朝は早く起きてノンビリして、ランチを摂って出て来るそうで、朝のゆっくりした自由な時間がゴージャスだと言っていた。3週間連続の休暇を年に2回取り、毎回セイロンに行っていた。「あそこは A kind of Paradise だ」と言っていた。スリランカと名前を変える少し前だった。毎年2-3回数機の観測ロケットをワロップスから打ち上げて、下部電離層の研究をしていた。自分の実験のための立派なトレーラーを持ち、専任のテクニシャンや多くのコントラクターを使い盛大にやっていた。本人もまさかと思っていたようだった。彼は背番号が大きかったので、クビの心配なかったが、実験の金を失い、オフィスで細々と今までに得られたデータを使って理論研究をすることになった。次の週打ち上げ予定だったロケットの搭載機器はもう完成していたが、取り上げられた実験室から廊下へ放り出され、他の研究者が禿鷹のように集まって、欲しい部品やコンポーネントを外して持ち去り、残りのガラクタは夜に掃除の黒人のおばさんが捨ててしまった。専任のテクニシャンも職を失い、ガランとした実験室から電話を掛けまくっていたが、次の職が見付からず、オドオドしていた。兄がボール・ブラザーズ(大型ロケット以外の宇宙関連コングロマリット)の本社(コロラド)にいて、その伝手でユタにあるFAA(米国航空局)の航空機用機器の検査施設で働くことになり、車に家族と家財道具全部を(ソファも屋根の上に)積んで、ひと月後にトボトボと出て行った。当時は石油ショックの前で、アメリカの車は大きかった。私の乗っていたアメリカン・アンバサダーというフルサイズの車のエンジンの排気量は450キュービック・インチ(約7,000cc)で幅2mを越えていた。安いところではガソリンがガロン当たり26セントという時代だった。

後にLANDSAT1号と呼ばれることになったERTSが軍用でない初めての地球観測衛星として打ち上げられたのは私が行ってすぐの1972年の夏だった。その頃アメリカは世界最大の穀物輸出国、ソ連は最大の輸入国だった。その頃ニクソン大統領が大豆の輸出制限をする(それが理由か、キッコウマンがアメリカに醤油工場を創った)など、天候不順でアメリカの農作物の不

作などもあって世界的に食料を巡る駆け引きが大きくなっていった。ERTSはソ連の穀倉地帯(今のウクライナ辺り)の小麦の生育状況を把握することで、シカゴの穀物市場で有利な立場に立つことを目的に計画された。しかし、ERTSは一般大衆が予想もしなかった宇宙から見た地球の様々な様子を広く明らかにし、大きな可能性が開かれることを教えた。ERTSのProject ScientistだったNordbergはGSFCのLaboratory (Division) ChiefからDirectorateのDirectorに昇格した。彼は何故か私に親切にしてくれた。公開されていない画像を見せてくれたり、新しい発見をイロイロ惜しげなく話してくれた。当時は分解能も今よりずっと低く、衛星画像だけではよく判らないことが多かった。例えば、何故かサハラ砂漠の進行が止まっているところがあった、そのGround Truthに出かけて分かったのは、国境でもなく理由は不明だが、そこには延々と張られた鉄条網があった。私はその時上層大気(下部電離層)の光化学反応の研究(アメリカの科学アカデミーとNASAとの契約研究テーマ)をしていたが、いずれ日本へ帰ったら電波で宇宙から地球を見るようなことをしてみたいと思った。彼は俺の名前の日本語読みは「KITAYAMA」だと言うので聞くと、「Professor Fujitaに教えて貰ったと言っていた。彼のいたシカゴ大の気象の教授で、トルネードの権威だった。どちらも移民で仲良くしていたようだった。Prof. Fujitaは1973年頃GSFCへ講演に来られた。小柄だが非常にエネルギッシュな感じの人だった。トルネードのすぐ近くを飛行機で飛んで実験をするなど体当たりの研究をして頭角を現されたことが実感された。しかし、先生の半生の研究の総括のような話だったこともあるが、話しの最初と最後に、「アメリカ国籍を取って10年になった。非常にProud ofだ」と繰り返されたことが印象的だった。先生の別の意味での苦勞が見えた気がした。

Prof. Fujitaと言えば、後にTRMMが成功し、1998年にNASAのDistinguished Public Service Medal (DPSM) を貰った時、NASA の連中が「これはNASAの最高の賞で、お前は日本人で初めてだ」と言うので調べてみた。Prof. Fujitaが飛行機の墜落原因になるダウンバーストの発見で1980年代半ばに貰っておられた。俺は二人目だと言うと、「あれはアメリカ人だ」とアッサリ言われてしまった。その数年前、オリンピックの女子フィギュアスケートで日系のYAMAGUCHIが優勝した時、日本のマスコミが騒いだら、「あれはアメリカ人だ」ムキになって言う人がいたことを思い出した。アメリカは世界の中で特殊な所(国)であるように思われる。何処から来てもアメリカに住めば、日常生活ではアメリカ人として受け入れられ、更に国籍を取れば、完全アメリカ人として扱われる。或る人が、アメリカに住めばすぐにアメリカ人になれるが、ヨーロッパには長く住んでも何時までもエトランゼだと言っていた。そう言えば、ニューオーリンズのようなところで私に道を訊いた白人のお婆さんがいた。1972年、まだ人種差別がかなりある頃だった。

アメリカへは2回(1972-74, 1993-95)とも言わば自営業(研究請負)のような立場で行った。アメリカでは誰もがTax Return(確定申告のようなもの)をする必要があるが、自営業の場合これを非常に詳しくやる必要がある(でないといくら損をする)。この請負業に関わる支出と認められるものは全部控除される。通勤のための自動車購入費、ガソリン代、修理代、冬のタイヤ交換代、アパート代(家族相当分は減額)、昼飯(外食)代、レシートなど全て証拠書類を残して添付する。割合弾力的というか、大雑把、いい加減なところもあって、レシートの必要のないものは言ったが勝ち、言わなければ損と言う感じもある。レシートの必要のない昼飯代を大分多めに出した私のある先輩は税務署に呼び出され、「まあその椅子に座れ」と言われ、担当の役人がその周りをグルット一回りして、「コイツなら、このくらい食うか」とOKが出たという笑い話のような本当の話もある。おかげで日本の確定申告は全く苦にならない。

アメリカの勤務からではなく、生活から学んだことの最大は遊ぶことと言うよりは、生活を楽しむことであった。遊びと言ってしまえばチョッとヒッカカルが、日本でも私は道川や内之浦への実験にはスクーター(道川)や車で行き、帰りにアチコチ寄ったり、回ったりしてることが多かった。あいつ等は実験に行ったら何時帰ってか分からんと当時の所長が嘆いていたそうである。



▲ Monument Valley, 8/9/1973



▲ South Rim, 8/11/1973

世知辛い今から比べると平和だったなあと言うしかない。夏に2週間休みを取ってスペース・モーターズの株主5人で北海道を一周したこともあり、主要4島は殆どの岬の先までも回った。しかし、アメリカのように日常生活の中で家族を主体に楽しむということは、当時の日本では戦後からそういう余裕が無かった時代の名残がまだ後を引いていた。本当にその後の私の人生の生き方と言うか考え方がすっかり変わった(その後の人生はその通りに生きたという訳でもないが)。

私が最初に渡米した1970年代初頭は、日本では学園紛争が終末期で、浅間山荘事件などから間もない頃だった。アメリカではロバート・ケネディ、キング牧師暗殺、アラバマ州立大事件が起こって間もない頃で、チョッと前まではワシントンからポトマックを渡ったバージニアでは白黒の便所が分かれていたそうである。しかし治安という面ではマダマダ安全な時代で、私たちが住んでいた郊外では、学校が終わった後、子供たちが友達と暗くなるまで遊んでいても全く心配しなかった。20年後CRLを辞めてから行った時にはすっかり変わって、危ない国になっていた。本当にいい時にいい経験が出来たと思っている。アメリカ中をキャンプして回った。土曜日に大使館にあった日本語学校へ上の二人を連れて行き、家内と娘と一緒にワシントン市内で時間を潰し、午後から近くのいろんなキャンプ場で一晩キャンプして、キャンプファイアを楽しみ、日曜の昼過ぎに帰宅すると、教会帰りの着飾った善男善女に捕まり、イエス・キリストの有難いお話しを聞かされ、日曜の朝は教会へ来るようにと強く勧められたこともよくあった。1973年の夏には住んでいた東海岸(メリーランド州)から西海岸までいろんなところを回り、3週間以上かけてキャンプをしながら大陸横断の往復をしたり、春や秋には東海岸沿いのUS-1(差し詰め国道一号線)では、南の端のキーウエスト、「US-1 End」と書かれたところまで、北はメイン州の奥までも行った。秋には紅葉を求めてバージニアとウェストバージニアの州境を走るアパラチア山脈沿い(Shenandoah, Blue Ridge)にケンタッキーのOld Smokey Mountain までやニューイングランドへもよく行った。結局、帰る時に2年余りで走行距離9万6千マイルになっていた。アラスカとオクラホマ以外の48州に行った(ハワイはレンタカー)。残りの2州は2回目の時(1993-5)に行き、アラスカで初夏に北極海、厳冬に犬橇レースのユーコン・クエストと一緒にカナダ国境までも行った。全50州に行ったことになる。テントやいろんなキャンプ用品も持って帰ったが、日本ではそれほど何回もキャンプに行けなかった。

NASAはスプートニクに驚いたアメリカ政府が、軍関係などの宇宙開発をやっている部門を統合して急遽創った組織(引き抜かれた軍の研究所などでは、また宇宙関係が内部で復活したのはどの国の官僚機構でも同じことなのだが)で、研究所でもアカデミアというより役所的雰囲気



▲ Monument Valley, 8/9/2011



▲ South Rim, 8/8/2011

多く残っていた。Section Chief(研究室長)にも室員(特に私のような請負研究員)の勤務管理に熱心な奴もいて、そういう奴の下に入ると時間の自由が制約されて大変なのだが、私を招んでくれたDr. Aikinは提案書でアグリーした研究がキチンと進んでいけば細かいことは何も言わなかった(一年経って滞在を延長しようとした時、「1年で帰って来い、でないとクビだ」とRRLのK部長に強く言われ、その話を彼にした時、「お前の実験設備にHalf Million Dollarsを注ぎ込んだ。結果を出さずに帰られたら困る」と強く言われ、夜逃げをするか、アメリカに永住するか悩んだことがあった)。おかげで自由気ままに休んでアメリカ中を回り、いろんな経験が出来た。彼のところへ行けたのは本当に運が良かったと思っている。あの時の豊富な(異例とも言える)経験が無ければ、私のその後の人生も大分違っていたのではないかとさえ感じる。1980年代後半、日本でも外国人研究者の招へいの枠が広がった。それを利用してDr. Aikinを奥さん同伴で3ヶ月間日本へ招ぶことが出来た。彼は「俺は沢山外国人研究者を招んだが、招び返して貰ったのはこれが初めてだ」と喜んでくれた。

余談だが、一昨年(2011)夏、男の二人の孫(高一と中2)に加え、3人の息子たちも夏休みを取って、総計6人でアメリカへキャンプに行った。サンフランシスコ→ラスベガス(ここで4駆車を借りて)→グランド・キャニオン(2泊)→モニュメント・バレー→ブライス・キャニオン→ザイオン→ラスベガス→セコイア→ヨセミテ→サンフランシスコ(車を返却)という強行軍であった。あるアメリカの友人にHectic Scheduleと言われたが、昔の西部への旅の一部を殆どそのまま通ったのであった。あの頃は石油ショックの前で車も大きく、速度制限も街中しかない州が多かった。以前より移動に時間がかかった以外はこの40年ほどで大きく変わったことはそれほどなかったが、目についたのは観光地の開発が進んでいる(自然が壊されている)ことだった。観光客が増え、それを安全に受け入れ、秩序を保つためには仕方ないのかもしれないが、孫たちと末の息子(生後6週間で帰国した)は日本では想像も付かない初めての経験が印象的であったようだし、上の二人の息子たちは、自分が幼い(小4と小2)頃の思い出が懐かしかったようである。私にとって最初の孫が生まれた時からの夢が実現したのだった。■